

本日の学び:「祈りの中の双子」 テキスト:創世記25章19-26節

【理解の手がかりとして】

■ 創世記を学ぶに際して

旧約聖書は紀元前6世紀頃にバビロンに捕囚されていたユダヤ人たちによって編纂されたと言われている。その後、ユダヤ人たちが地中海周辺の各地に散在するにつれて、ヘブライ語よりもギリシャ語に堪能なユダヤ人が増え始めたので、それらの散在ユダヤ人たちにも分かるように、前3世紀頃にギリシャ語訳が作成された。それが「七十人訳聖書」(70人の学者による訳)と呼ばれる。

その「七十人訳聖書」では、創世記は「宇宙の起源(Genesis Kosmou)」と名付けられた。その題名が示すように、「創世記」はそもそも宇宙はどのように始まり、自然と人はどのように創造されたのか、そして、イスラエル人及びアラブ人の先祖であるアブラハムとその子孫であるイサク、ヤコブ、ヨセフがどのように人生を過ごしつつ、失敗したり成功したりしながら、人間として信仰的に成長して人生を終えたのかを述べる物語である。

旧約聖書の最初の五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)を「モーセ五書」と呼び、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の共通の経典となっている。とくに「創世記」はこれらの宗教に共通する世界観と人間観を理解するのに必須の書であると思われる。

創世記は大きくは二つの資料からなる書物であると言われる。一つは神の名をエロヒムと呼ぶ「エロヒム資料」。もう一つは神の名をヤハウェと呼ぶ「ヤハウェ資料」である。そして更にエロヒム資料は二つの異なる伝承から成るとい説があらわれ、一つはそのままエロヒム資料の名称を引継ぎ、もう一つには「祭司資料」という名が与えられた。なおヤハウェ資料からは、後に「申命記資料」が分離された(これは創世記には出て来ない)。このように「モーセ五書」は、ヤハウェ資料とエロヒム資料、祭司資料と申命記資料の四つから成ると考えられている。以下、創世記に関連する三つの資料について特徴を紹介する。

- ヤハウェ資料…南イスラエルのユダ族の間で伝承された物語をまとめたもの。その特徴は、神の名前として「ヤハウェ」を使うこと。人間に関心を持ち、人間の理解に深く鋭いものがあり、神が直接人間に語りかけること。また人名や地名などの由来を説明することが多くある。
- エロヒム資料…イスラエル王国が紀元前922年に南北に分裂した後に、北イスラエル王国で前8世紀に成立したと言われる。その特徴は、北方イスラエルの諸聖所を多く叙述し、北イスラエルの諸部族(エフライム族など)に関する話が中心となっている。神の名として「エロヒム」(神の尊称である複数形)を用いる。ヤハウェ資料が神から見た人間を記述しているのに対して、エロヒム資料は人間の側から見た神への態度、すなわち「信仰」を問題にしている。
- 祭司資料…祭司階級の間で長年伝えられていたもの。客観的、学者的であり、歴史に興味を持ち、そのため登場人物の年令や出来事が起こった年月をきちんと記す。

■ 本日の聖書箇所より

さて、今課のテキストのイサク物語は祭司資料が物語を始める典型的な言い方である。「アブラハムの息子イサクの系図は次のとおりである」(25:19)とあるように。20節に「パダン・アラム」とあるが、24章10節(ヤハウェ資料)では異なる伝承によるせいか地名(「アラム・ナハラエムのナホルの町」)に違いがある。いずれにしてもメソポタミアの「ハラン」のあったところで、アラム地方と呼ばれた地域にあった町である。ここからアブラハムは、ヤハウェに「父の家を離れ、私が示す地に行け」と言われ出てきた。したがってアブラハムも、もとはアラム人であった、ということができる。

続く25章21-26節(~34節)はヤハウエ資料である。21節に「妻に子供ができなかったので」とある。イサクは40歳の時にリベカと結婚し、子どもたちが生まれたのは60歳であった。つまり結婚後、ほぼ20年間、子どもに恵まれなかったのである。先代のアブラハムの妻サラにもやはりなかなか子どもが与えられなかった。イサク物語で特徴的なのは「(イサクは)妻のために主に祈った」(25:21)という点。そして同節には「その祈りは主に聞き入れられ、妻リベカは身ごもった」とあるが、その成就には20年間という歳月が必要とされたということ。この短い一節に「不断の祈り」の大切さというメッセージを読み取ることもできよう。

リベカは双子を身ごもった。その双子が胎内にいて押し合う。そのことはこの双子間の将来の争いの予表のようである。将来二つの民族となる双子が宿っていて、後に兄は弟に仕えるようになるということが告げられたのであった(25:23)。⇒この「兄は弟に仕える」という点につき「コラム」参照。

双子のうち初めに出て来たのは「エサウ」である。エサウという名前は古代オリエントの他のところでも使われておらず、その由来は不明。「赤くて」というヘブライ語アドモニは、彼から出た「エドム」と関連している。また「毛深い」のヘブライ語セアルはエドム人が住んでいた「セイル」という地方名に関連しているとか(⇒32:4)。

そしてヤコブの名前の由来は「かかと」を意味するヘブライ語アーケブと関連付けられている。「しかし、実際には、『ヤーコブエル』(神が守ってくださいますように)の短縮形であろうとされます」(加納貞彦)。

コラム:「紀元前10世紀のダビデ・ソロモンの時代に、弟ヤコブの子孫であるイスラエルが、兄エサウの子孫と考えられたエドムを従えたことで、『強くなる』『仕える』を文字通りに読む限りは、一時期実現しました。しかし、その前も、その後も、この言葉は実現していません。兄の子孫と弟の子孫は並行して存在しています。兄エサウと弟ヤコブが生きていた時代には、後の物語に見るように、むしろ弟ヤコブが兄エサウに仕えた形で書かれています。…ということで、私はこの言葉は、兄エサウではなく弟ヤコブが、祖父アブラハム、父イサクの信仰を継ぐことを表していると解釈したいと思います。すなわち、世界史の中では、ヤコブの精神的な(すなわち、信仰的な)影響が、エサウより大きかった、ということの意味していると思います。…単に…イスラエル中心主義を表した言葉であるとは思われません。」(加納貞彦)

「結論として言えるのは、将来のことは『兄が弟に仕えるようになる』のか、逆に『弟が兄に仕えるようになる』のか、その託宣が与えられた時点ではわからないということである。…現在から過去を振り返ってはじめて、過去の言葉や出来事の意味が分かるのだ。…信仰をもってリスクを取って自分の人生を歩むことが大切なのだ。」(コダヤ教ラビ ジョナサン・サックス)

『聖書教育』より…「私たちにも答えが与えられない長い祈りの時があります」(聖書の学び~主に尋ねるリベカ)「私たちの祈りに対する主の答えは、具体的に直接、主の声として聞こえてこなくても、聖書の言葉に、それがあつたことや、出会った人の声や言葉で与えられることがあります。そのような経験があれば、証しとして分かちあってみましょう。」(大人クラス)